

ご挨拶
Foreward

加茂川 幸夫

JAL201 実行委員会委員長 / 東京国立近代美術館長

Kamogawa Sachio

President of JAL 2014 Executive Committee

Director of The National Museum of Modern Art, Tokyo

みなさん、お早うございます。今、水谷さんから紹介していただきました当館の加茂川です。この公開ワークショップを主催しています JAL プロジェクトの実行委員会の委員長を務めておりますので、その立場からみなさんにお礼の挨拶を申し上げたいと思います。生憎の雨になりましたけれども、年末のお忙しい中、ご出席いただきましたことをまずはお礼申し上げます。

この JAL プロジェクトは海外において日本の美術資料の情報発信等に関わっておられる専門家の方々を日本にお招きして、日本の関係機関、又は関係者・専門家のご協力を得ながら研修・交流事業を実施するという事業でございます。実は先月の末に来日していただきまして、10 日間みっちりタフなスケジュールを、関西方面でのプログラムも含めて、こなしていただきました。お疲れの所かもしれませんけれども、参加者の方々には心からお礼申し上げたいと思います。今回が最初の回であったのですが、アメリカ合衆国、フランス、イギリスの 3 カ国から 7 名の参加者を得ることが出来ました。これも冒頭の説明にありました様に、本事業の意義を高く評価していただきまして、初回の事業にもかかわらず、「文化庁の補助事業」になっている、位置づけの高い事業だということ、誇り高くご紹介したいと思います。

7 名の参加者の研修成果を踏まえて今日の公開ワークショップになる訳ですが、私共が今日一日かけて皆様方と共に協議し合いたいと思っていますのは、日本の美術に関する情報発信の重要性が今とても高まっているという現状を踏まえた課題についてです。例えば一つには、情報のデジタル化に伴い、ネット利用の拡大、あるいは、データベースのあり方も変わって参りましたから、情報通信技術が飛躍的に進展する中で、日本の文化・美術情報も含めた情報発信をどう構築・再構築していったらいいのかという課題があると思います。また、海外では伝統的に日本の美術、日本文化に対する関心が高く、一定のニーズがあると思いますけど、特に最近の「メディアアート」、「アニメーション」ですとか「ゲームソフト」ですとか、そういったものを含む現代美術、政府も今「クールジャパン」として、力を入れようとしている政策の一つでありますけれども、このような大きな関心・ニーズに対して、どうやって正しく情報発信していくのかということも、やはり意識していかなければならない課題、環境変化ではないかと思えます。

本事業に参加していただきました 7 名の方々は、いずれもそういった事柄に関してそれぞれのお国の最前線で、いわば「情報発信基地」を守ってきておられる、身を持ってその課題と取り組んでおられる方々でございます。その方々が 10 日間の研修を通して最新の日本の状況に触れ専門家の方々と交流なさる中で、バージョンアップされた情報をこのワークショップでさらに中身を濃く発表し、情報発信していただき、皆様方とのネットワークもさらに維持強化できればと思っております。是非会場の皆様方、この 7 名の方々にエールを送っていただき、積極的にワークショップに参加していただきたいと思えます。

蛇足になりますけれども、6 年後には 2020 年の「東京オリンピック・パラリンピック」いう国

の一大イベントが行われます。最近マスコミでも取り上げられるようになっておりますけど、単にスポーツの一大イベントではなくて、「スポーツ文化」の一大イベントだという認識が高まって参りました。私ども美術館でも、美術館だけではありませんけども、6年後を見据えての情報発信について様々な形で取り組んで行かなくてはならないという意識を持って予算要求や事業の検討を始めています。この意味でも日本美術の情報発信の重要性というのは高まっていると言えますし、「共通理解」にすべきではないかと思っています。このワークショップの位置づけもその分高まっていると言えると思います。

一日少し長いプログラムになっているかもしれませんが、皆様のご協力を得ながら実りある、成果の多いものにしたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました



左より市川 / 岩瀬 / 足立 / 加茂川実行委員長 / 藤田 / 長谷川 / 吉村 / 平野

2014.12.11

東京国立近代美術館講堂にて